



「オリーブの丘 樹木葬墓苑」の上段エリア。斜面地の各区画の地中には栗石・竹炭・ワラを敷き詰め、崖崩れのリスクを低減する水脈を醸成し、また随所に木杭を打設して地盤強化を図る。夕暮れが近づくとももに灯りがともる

下の写真は斜面下のエリア。宝泉寺では檀信徒など、既存の墓地使用者で承継者不在の方を優先的に案内している。永代供養がなされる安心感から好評を得ている



臨済宗南禅寺派
薬王院 宝泉寺
東京都八王子市館町 344
<https://housenji.net/>



「オリーブの丘 樹木葬墓苑」公式サイトは、宝泉寺サイト内のリンクからご覧ください

寺院を専門に墓石事業を軸に、境内整備・墓地管理・無縁墓および永代供養墓整備・福利厚生&健康サービス（THEZEN倶楽部）・樹木葬及び納骨堂の企画販売、マーケティング戦略など、多角的な事業を展開する(株)彩石(大西正也社長)。また寺院分野にとどまらず、国産銘石を調達・施工する建築石工事の実績も積み重ねているのは、本誌で紹介しているとおりだ(昨年八月号から関連記事および広告を掲載)。

そしてこのほど、同社が企画・デザインを手がけた樹木葬「オリーブの丘 樹木葬墓苑」が、昨年十二月、東京都八王子市にある古刹・薬王

院宝泉寺の境内に竣工した。建築設計事務所との協働により、面積約一〇〇〇㎡の斜面地を生かして開かれた「オリーブの丘」は、寺院の境内地の樹木葬としては規模も大きく、千十二区画を有する。地盤改良を含めた空間全体の設えから、石の意匠、さらには使用者に提供される各種サービスに至るまで、同社のノウハウが凝縮された樹木葬墓苑といえる。

もつとも、宝泉寺・藤本大器住職の強い思いとこだわりが細部にまで反映されているのは、いうまでもない。お寺の使命である供養にどのように向き合うのか、故人や遺族にとってお墓

とはどのような存在であるべきなのか、そうした問いを住職自らが熟慮した末に生まれたのが、この「オリーブの丘」である。そこで、今回は藤本住職に新たな樹木葬「オリーブの丘」に寄せる思いなどをお聞きした。

* * *

——「オリーブの丘」を整備するに至った背景を教えてください。

藤本住職 昭和四十年頃、当山は檀家が七軒のみのお寺でした。その後、ご縁があつて霊園事業を開始し、檀信徒の増加とともに一般の方ともご縁が生まれ、平成の初め頃にはお檀家の相続の問題でお寺の隣接地を購入し、そこに葬祭場を新設して多くの方にご利用いただくようになりました。すると今度は反対側の隣接地を所有していたお檀家が亡くなり、同じく相続の問題で土地の購入を相談されて取得。そこがいま、「オリーブの丘」を新設した場所です。

お寺は末代まで、皆様に安心して仏様の菩提を託していただくことが一番の使命です。

では、「お寺の将来に資するもの（お寺が存続し続け、その使命を果たすために必要なもの）」とは

(株)彩石の樹木葬「1」

東京・八王子の宝泉寺 「オリーブの丘 樹木葬墓苑」

●インタビュー

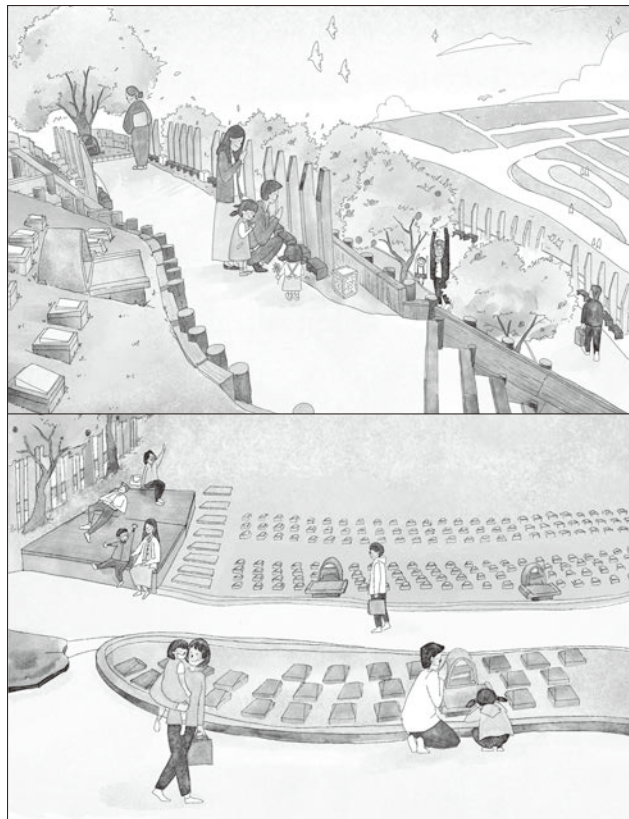
薬王院 宝泉寺（一五〇三年建立）

住職 藤本大器師

(株)彩石
本社:東京都文京区小石川3-3-7
tel.03-6801-8902
<https://saiseki.net/>



宝泉寺・藤本住職(右)と(株)彩石・大西社長



「オリーブの丘」でのお参りイメージ(横彩石提供)



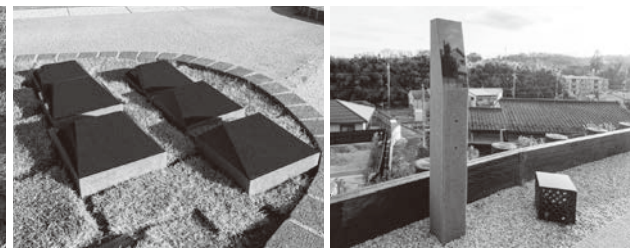
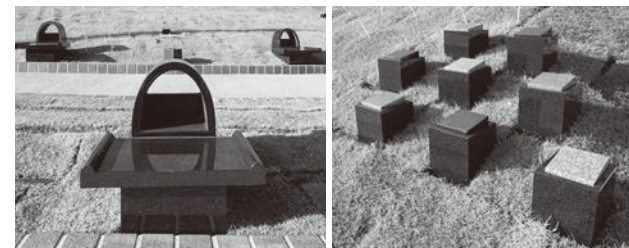
「オリーブの丘」に新設された合祀墓(左は伊予青石製)。合祀墓の地中など随所に木杭を打設し、地盤強化を図る



1-2 上段エリア 3-4 下段エリア 5-6 上部からの眺望。
この地形を生かし、「今後は子どもたちが楽しめる施設
づくりなども考えたい」と藤本住職

ここもポイント！山の土中水脈を醸成する樹木葬

斜面地に築かれた「オリーブの丘」では各区画の地中に栗石・竹炭・ワラを敷き詰めて、崖崩れのリスク低減や多様な生物の掘りどころとなる水脈を醸成していく。これは安全性の向上とともに、樹木葬として多くの人の思いを受け入れ続け、愛される場所を育む、未来志向の取り組みである。また随所に木杭も打設し、地盤の強化を図っている



右から3点は各区画に設置される墓碑。右は灯籠型、左2点はプレート型の大と小。いずれも黒みかげ石製だが、彫刻銘板は木製やグレー系・青系・ピンク系の石などから選べる。左は参拝用の花台・香炉(黒みかげ)

何か」を考えると、実際に当山の檀信徒でもお墓の承継に不安を抱える方が増えている昨今において、その菩提を任せていただける環境を整備し、なおかつお寺が存続し得る財政基盤も築いていくことが不可欠です。

そうしたことから、永代供養を前提にした樹木葬の必要性を考え始め、令和に入った頃から具体的に構想を固めていきました。

—— 樹木葬について、実際にどのような構想を描いていましたか？

藤本住職 いわゆる花壇のような、お骨を収納するだけの樹木葬は、私自身が受け入れられませんでした。そうではなく、墓地全体が自然の風景と溶け込み、お骨を大地へ納め、故人の魂が自然へと還ることのできるものになればならないと考えました。確かにいま、樹木葬はとても人気ですが、お寺が運営するお墓として「仏様を粗末にしない」ということは大前提になります。そのうえで檀信徒や一般の方々にも親しまれ、安心される樹木葬を構想しました。

幸い「オリーブの丘」を整備した土地は山の斜面地なので、あえて斜面を均すなどの手を加え

ることは極力せず、山そのものの地形を生かした樹木葬が生まれました。そこは当初からの構想が形になり、私としては大満足です。

—— 「オリーブの丘」を計画するうえで、特にこだわった点は何でしょうか？

藤本住職 いくつもあります(笑)。でも、やはり「粉骨はしない」ということです。あれはとても忍びないものだからね。また「できるだけ骨壺のまま納めたい」とも要望しました。実際に「オリーブの丘」では、骨壺もしくは骨袋で埋葬し、粉骨はいたしません。

また、自然のなかに眠るような穏やかな空間にしたいと思いました。丘から山へと続く公園のような空間で、みんなで散歩をしたり憩いながら故人を偲ぶことができるように、全面に芝を張っています。樹木葬の前面に駐車場も新設しましたが、そこにも芝を張っています。

もう一つ、これは他の樹木葬ではあまりないと思いますが、いわゆるデベロッパーなどの仲介業者を入れず、出資者も募らず、すべて当山の資産で開発を行なったことも私の強いこだわりです。それは、「お寺の使命として、仏様や



宝泉寺では檀信徒用墓地と宗旨宗派不問の霊園を設けている。特に霊園(写真上の2点)は(株)彩石・大西社長が企画等を託されたもので、以来、約三十年のパートナーシップが続いている。藤本住職は「大西社長とは長年の付き合いだから、遠慮なく意見を出し合える関係ができています」と話す。写真4点目は宝泉寺本堂

ご遺族に対して末代まで責任を持つ」という覚悟です。それはお寺だからこそできることであり、そこを軽視することはあり得ません。

――区画の構成や供養の仕組み、付帯サービスについて教えてください。

藤本住職 区画は三タイプ(墓碑となる石も大小のプレート型と灯籠型の三タイプ)あり、前述のように、骨壺で納める区画と骨袋で納める区画を設けています。いずれも使用期間は二十年(更新可能で、期間が満了すると当山が責任を持って樹木葬内に新設した合祀墓(二基あり)へ移し

て、永代にわたって供養します。各区画とも基本的に二人用ですが、埋葬スペースに余裕を持たせてあるので、三体以上のご要望にも対応できるようにしています。その他、お盆やお彼岸などに合同供養も行ないます。

付帯サービスとしては使用者対象の「オリブ友の会」をつくり、オリブの実の収穫祭やオリブオイルの試飲会、オリブオイル製造体験ツアーなどを開催する予定です。また彩石さんがグループ会社で運営する「THE ZEN 倶楽部」とも連携し、同倶楽部が用意するお得

う場としてのお寺の役割や存在価値を深く理解

されていて、仏様とご遺族をはじめ、お寺に

られる方々をととても大切に考えていらつしやる。そのなかで培ってきた多くのノウハウを提案し

にお寺にふさわしい樹木葬が完成しました。――最後に、改めてご住職が考えるお墓の役割を教えてください。

千年のオリブから広がる輪

「オリブの丘」のシンボルツリーを含む3本のオリブは、大西社長の紹介で、香川県小豆島で(樹齢千年のオリブ大樹)を守り続け、オリブの森を育む小豆島ヘルシーランド(株)により植樹されたもの。同社の柳生忠勝副社長は「“生命の木”と呼ばれるオリブは家族の平和と繁栄の象徴で、ご先祖から子々孫々と続くお墓との親和性が高い」という。今後はオリブ友の会の会員に向けて、オリブの実の収穫祭やオリブオイル試飲会、ここで収穫した実によるオリブオイル製造体験ツアー(小豆島)などを企画。「オリブから広がる輪を何百年、何千年と育んでいきたい」と柳生副社長はいう(<https://shl-olive.co.jp/>)。写真上は小豆島から移植されたオリブ写真下は柳生副社長(右)と大西社長



藤本住職 お墓はお骨の収納場所ではなく、そこに向き合うことで、その方のおかげで、いまの自分があることを確認し、尊崇と感謝の気持ちを持つための場所であるべきです。よく檀家さんにもお話ししますが、私たちが生きている時間軸を横の糸とすると、先祖代々、子々孫々へと続く時間軸は縦の糸になる。その縦と横の糸が交わるところに私たちは生きていて、その縁^{よすが}を結ぶのがお墓です。

だからこそ、それを蔑^{ないがし}ろにするようなお墓を私にはつくることはできません。それは従来のお墓でも、樹木葬、納骨堂でも同じです。物理的にも、また精神的にも、すぐに朽ちてなくなるような安易なものではなく、末長く残っていくお墓をつくり、そこをしっかりと守り続けていく。そのための仕組みづくりから考えることも重要だと考えています。

――貴重なお話をありがとうございます。

(聞き手＝編集部 安田寛)

なサービス(旅行、グルメ、レジャー等の百四十万以上のサービス/左頁広告及び昨年八月号参照)を提供します。つまり供養だけでなく、使用者との生前からの関係性の構築・強化にも力を入れていくということで、これは今後の寺院運営には欠かせない施策と捉えています。

ちなみに「オリブの丘」には、その名とおりオリブの木を多数植樹していて、特にシンボルツリーなどの三本は、日本におけるオリブ栽培の本場で、樹齢千年のオリブ大樹で有名な香川県小豆島から移植されたものです(小豆島ヘルシーランド(株)/左頁上段)。私が実のなる木を植え、使用者の